
下り坂

浅黄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下り坂

【コード】

N7040M

【作者名】

浅黄

【あらすじ】

主人公コーキの周りではバラバラ殺人事件が発生したらしい狙われるのは高校生ばかりで…

目覚めの悪い朝（前書き）

若干、グロ注意です

目覚めの悪い朝

走っても、走っても、ダメだった。

恐怖という恐怖が身体から離れない。

背後に人の気配がするのに、怖くて後ろを振り返る事ができない。

僕がどれだけの距離を走ったのか、自分自身よく分からない。

でも、坂を上りきったら大丈夫だ。

無事に帰る事が出来る。

きつと、大丈夫だ。

きつと、終わらせる事が出来る。

この悪質なイタズラを

事の始まりは何だったか？

それは七日前にさかのぼる。

塾が終わったのは夜11時。

真っ暗で、街灯の不気味な青白い光だけが頼りだった。

街灯に、蛾が集っているのがはつきり見る事が出来た。

僕は小さな頃から蛾が嫌いだった。

街灯の真下を反れ、道路の真ん中を歩いた。

と、僕の足が何か棒のようなものを蹴飛ばした。

何だかよく分からないが、気持ちの悪い感触だった。

僕が蹴飛ばした物が、街灯の近くまで飛んでいった。

僕は一体何を蹴飛ばしてしまったのか気になったので、街灯のすぐ近くまで寄った。

青白い、棒だった。

先端は五つに分かれていて、もう片方の先端は切断面が赤く、中心は白かった。

僕はその棒から目が離せなかった。

棒じゃない、だろ？

棒の断面から赤い液体が流れ出た。

液体は道路をどンドン赤く染めていく。

腕、

人間の腕？

何で？

今朝、耳に入ってきた会話を思い出す。

「近頃、バラバラ殺人事件が流行ってるんだって。」

バラバラ…サツジン？

僕は走ることも、叫ぶ事も出来なかった。

ただ冷静に頭が働く。

綺麗に整った爪からして、この腕は女のものだろう。

何者に、どうやって切断された？

切り口からして刃物で切り落とされたに違いない。

その時、背後から僕の首を何者かが掴んだ。

何者かの爪が僕の首に食い込む。

誰だ…？

後ろを振り返る瞬間に聞き覚えのある声が僕を呼んだ。

「コーキ！」

目を開けると、少年の怒った顔が目に入った。

「起きるの遅っ！早くしろよ！！」

僕はボーっとしたまま、返事をした。

頭を掻き回し、今日も寝癖が酷い事を実感した。

「僕、変な夢見てたみたいだ」

「ああ。うなされてたな」

少年はどうでも良さそうに言つと、着替え始めた。

「なら、起こせよ」

「そんな事はな、俺にとつてどーでも良いんだよ」

少年は野球のユニホームに身を包むと、小さな座卓を指差した。

見ると、味噌汁やら目玉焼きやらが並んでいる。

「さつさと食え」

少年は僕が礼を言おうとすると顔を背け、頭を掻きながら洗面所へと向かって行った。

「ありがとな、ユータ」

僕はユータに聞こえないくらい低い声でつぶやくと、ルームメイトの作った不味そうな朝食を口にかきこんだ。

今日は野球の試合がある。

それも、そんじょそこの練習試合とは違う。

甲子園で試合をするのだ。

ここまで来たからにはどうしても負けられない。

僕たち二人は野球の名門であるこの高校に遠くからわざわざ進学して来た。

ユータと僕は中学の時に知り合った。

それからは同じ野球部員として、共に汗を流して練習に打ち込んだ。今日の試合で負けてしまえば、部活は引退。

受験勉強一筋となってしまう。

ふと、感傷的になっていく自分に気が付いた。

試合前に何を考えている？

今は試合に勝つことだけを考えれば良い。

僕は今来ている服を脱ぎ捨て、ユニフォームを身に着けた。

洗面所に向かうと、ユータが鏡に写った自分を睨み付けていた。

緊張しているのだろう。

「ユータ、朝飯上手かったぜ」

僕が言っていると、ユータは一気に機嫌が悪くなった。

「何言ってるんだ？褒めたって何も出ないぞ？」

「マジで感心したわ。これから食事当番はユータに任せるかな」

「変な事言ってるんでその寝癖を直したらどうだ？バカかおまえ」

こんな時だからか、少しからかってやりたかった。

ユータは照れるとすぐに機嫌が悪くなる。

僕は笑って見せると、水を寝癖の酷い部分に着けた。

これで直るだろう。多分。

試合中は帽子を被るわけだし、寝癖なんてぶっちゃけどうでもよかつた。

中学の時から使っている愛用のポロポロになったスポーツバッグを肩に提げると、部屋の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

ユータは部屋の鍵を指に引っ掛けて振り回し、玄関で僕を待っている。

「早く来いよ。置いてくぞ」

「ああ、今行く」

外に出ると、蝉の声が五月蠅かった。

しばらく歩くと、ユータが口を開いた。

「なあ、知ってるか？」

「ん、何？」

信号が赤から青に変わる。

僕たちは歩き出した。

「バラバラ殺人事件」

「え？」

僕は体中から血の気が引いて行くのを感じた。忘れかかっていた今朝の夢を思い出しす

汗が、頬を伝って落ちた。

「何だよ、突然。こんな時に縁起でも無い話するなよ」

「いや、悪い。気になってさ。朝、ニュースでやってた」

「へえ、お前もニュースとか見るんだな」

僕は平常心を装い、冗談を言ってみたりした。

「ああ？見るに決まってるだろ。それでさ、被害者がな」

ユーキは一旦言葉をとぎり、僕の目を見る。

「こちら辺に住んでる高校生ばかりなんだ」

「え…、こちら辺？」

「ああ。確かこの辺りの住所だった。俺たちも気を付けねえとな…」

「何人、死んだの？」

僕は恐る恐る聞いてみた。

「少なくとも6人は殺されてる。行方不明者が他に7人。何せ死体がバラバラだからなかなか死体が出て来ない」

「そんな大変な事件、今まで僕知らなかったけどニュースにならなかつたの？」

怖さからか、この事件はユーキの勘違いか何かじゃないかと疑い始めていた。

「いや、それが昨日の深夜から今日の朝にかけてらしいぜ。殺したの」

「え…？」

6人も、たった一日で？

そんなに死体が見つかったのか？

「嘘だろ？」

「本当だって。こんな嘘吐いてどーすんだよ？」

今朝の夢のせいもあってか、僕は本当に怖かった。

切断された腕から流れ出る血

思い出すと身体が震えた。

「次はコーキが狙われるかもな」

ユータはそう言い、僕の背を叩いた。

僕の様子がおかしかったのに気が付いたのか、ユータは少し心配そうな顔をした。

「あ…、別に怖がらせるつもりは無くても…ただ、ちょっと分かってる、と僕は笑むと言った。

「何で、こんな話を？」

「いや…、何かな。嫌な予感がしたんだ」

僕は笑った。

「何だよ、それ」

すると、つられてユータも笑った。

「おかしいよな、やっぱ。さっきの話は全部忘れてくれ」

学校に着くと、甲子園行きのバスに部員全員が乗っていた。僕たち2人は駆け足でバスに乗り込んだ。

目覚めの悪い朝（後書き）

暑いので涼しくなるように怖い話を…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7040m/>

下り坂

2010年10月22日00時28分発行